

詩編 23:1-6 「主は私の羊飼ひ」

「主は羊飼ひ、わたしには何も欠けることがない。主はわたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴ひ、魂を生き返らせてくださる。主は御名にふさわしく、わたしを正しい道に導かれる。死の陰の谷を行くときも、わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。あなたの鞭、あなたの杖、それがわたしを力づける。わたしを苦しめる者を前にしても、あなたはわたしに食卓を整えてくださる。わたしの頭に香油を注ぎ、わたしの杯を溢れさせてくださる。命のある限り、恵みと慈しみはいつもわたしを追う。主の家にわたしは帰り、生涯、そこにとどまるであろう」

その昔、ユダヤのベツレヘムに、羊飼ひの男の子が住んでおりました。ほかの子に比べて少し背が低かったのですが、朝早くから夜遅くまで、野原で羊のお世話をし、日が高く照りつける昼間には、木陰に羊たちを伏させ、小さな豎琴を取り出し、やさしい調べを奏でて、羊たちを休ませるのです。それは、それは、やさしい、やさしい調べでありました。

男の子の奏でる、やさしい調べは、村で評判になりました。ある日、男の子は、王様の宮殿に呼ばれました。王様は、時々発作に襲われて、猛獣のように唸りながら、床の上を這いずり回り、苦しんでいたのです。ところが、男の子が、小さな豎琴を取り出し、やさしい調べを奏でますと、王様は心が落ち着き、もとの自分に返ることが出来たのです。それからは、何度となく、男の子は宮殿に呼ばれて、王様のために演奏するようになりました。

ある日、長いひげを蓄えた、恐ろしげな老人が、男の子の家を尋ねて来ました。男の子の顔を見るなり、「おまえ、おまえだ！」と老人は叫び、ふとところから容れ物を取り出して、男の子の頭に、いきなり油を注ぎ始めました。とてもよい香りのする油は、男の子の額を流れ、ほほを垂れ、やがて、部屋は、よい香り一杯になりました。老人は、男の子に向かって言いました。「神様は、おまえを、新しい王としてお立てになった。覚悟して働けよ！」

「神様は、あの男の子を、新しい王としてお立てになった」 このうわさを耳

にした王様は、真っ赤になって怒りました。ある日いつものように、気分のすぐれない王様のために、男の子が小さな豎琴を奏でていると、いきなり王様は槍を取って、男の子を刺し殺そうとしました。男の子は、王様を、とても、とても、恐れました。

やがて、隣の国との戦争が始まりました。男の子は、武器を取って戦争に行き、王様のために、命をかけて戦い、たくさんの敵を倒しました。たくさんの敵を倒せば、王様も許してくださるかもしれない、と思ったのです。ところが、男の子が、敵を倒せば倒すほど、王様は嫉妬に怒り狂いました。とうとう王様は、男の子を殺す為に、軍隊を送って、国中を追いかけ回すようになりました。男の子は、山の陰、深い谷間、暗い洞窟、荒れ果てた砂漠を、来る日も来る日も、逃げなければなりませんでした。

この男の子が、ダビデであります。ダビデは後に、イスラエルの王となりました。ダビデは、祈りの人でした。また、ダビデは、詩人でもありました。ダビデは、自分の人生における折々の祈りを、歌に詠んで、心の慰めとしました。ダビデが読んだ歌は、集められ、讃美歌集として、まとめられました。この讃美歌集は、エルサレムの神殿で、神様を礼拝するたびに、合唱隊によって声高らかに歌われるようになりました。この讃美歌集が、わたしたちの聖書の中に収められている詩編にほかなりません。

詩編 23 編は、ダビデの人生そのままの写しです。

日がじんと照りつける暑い日。羊も渇き、人も渇き、死ぬような思いをします。羊飼いは決心します。冷たい水の湧き出る泉に、羊たちを連れて行こう。羊飼いが立ち上がり、歩き始めると、羊たちはみな、ついて行きます。羊たちは、道を知りません。羊たちは、自分がどこにいるかも、わかりません。羊たちは、ひどい近眼であるために、すぐ目の前のものしか、見えません。ですが、羊たちは、知っているのです。羊飼いの後について行けば、間違いはない。という道を通ってかはわからないけれど、確かに羊飼いは、冷たい水の湧き出る泉に、自分たちを連れて行ってくれる。羊たちは、そのことを知っているのです。

今は新しい王様となったダビデは、羊飼いであった子どもの頃の生活を、なつかしく思い出しながら、詩編 23 編を詠んだのです。ダビデにも、迷い多き時がありました。行くべき道が、見えない時。自分がどこにいるかも、わからない時。目の前のことで精一杯で、遠くを見通すことなどできない時。体が渴き、心が渴き、魂が渴く時。その時、ダビデは、ただ神様に信頼しました。自分の人生を、神様の導きにお委ねしました。羊が羊飼いについて行くように、ダビデは神様について行きました。ダビデは今、自分の人生の終わりの時にさしかかって、確かにこう感じていたのです。「神様の導きお委ねして、間違いはなかった。今わたしには、何も欠けることがない。神様は、この人生の終わりの時にあたり、わたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴い、魂を生き返らせてくださった。神様は御名にふさわしく、わたしを正しい道に導いてくださった」

神様に導かれたダビデの人生は、平坦な道のりではありませんでした。羊飼いは、羊たちを連れて、山を越え、谷を越え、砂漠を越えて行きます。冷たい水の湧き出る、うるわしい地に辿り着くために、確かな道、間違いのない道を、羊飼いは一步一步進んで行くのです。

信頼することは、時に難しいことです。神様の導きに、自分の人生をお委ねしたとしても、どうしてこんな回り道をしなければならないのだろう、とか、どうしてこんな苦しい道を上らねばならないのだろう、とか、どうしてこんな光のあたらない暗い道を下らねばならないのだろう、とか、心に疑いが起こることが、しばしばあります。ですけれども、羊たちは、羊飼いを疑うことをしません。羊たちは、まっすぐな道を知らないし、自分でまっすぐに歩くこともできません。ですが、羊たちは、羊飼いをまっすぐ信じて、ひたすら着いて行くことだけが、出来たのです。

人生における最も暗い経験。それは、死の陰の谷を歩む経験です。死が、わたしたちの前に立ちはだかります。自分の配偶者が、自分の親が、自分の子どもが、死の陰の中へ、姿を消して行きます。ついには、自分自身が、死の陰の中

へと、吸い込まれそうになります。自分の死期というものを、悟る時がやって参ります。

しかし、羊飼いは知っているのです。この暗い谷間を抜けた向こうに、緑に輝く野原が広がっていることを。羊飼いは知っているのです。この暗い谷間を抜けた向こうに、わたしたちの魂の渇きを癒し、生き返らせる、憩いの水が湧き出る泉があることを。

今はもう年老いて、自分の子ソロモンに、王位を譲ろうとしていたダビデ。体は衰え、目の光は失われ、意識は遠のき、暗い眠りに落ちようとしていたダビデ。老いた王となったダビデは、自分の死期を悟りながら、なお、こう歌うことが出来たのです。「死の陰の谷を行くときも、わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる」

「あなたがわたしと共にいてくださる」これが、わたしたちの慰めであります。いったい、わたしたちは、何によっても、心を満足させることはできないし、何によっても、心の平安を得ることはできません。お金があつたとしても、地位があつたとしても、財産があつたとしても、名誉があつたとしても、名声があつたとしても、それらは、わたしたちの魂を慰めることが、できません。しかし、「あなたがわたしと共にいてくださる」「あなたがわたしと共にいてくださる」のなら、わたしたちは、ほんとうに満足できます。それこそが、慰めです。わたしたちは、こう言うことができるのです。「ああ、主イエスキリスト。死の陰の谷を行くとき、あなたがわたしと共にいてくださいます」

死の陰の谷を行くとき、「恐れ」という名の狼が、わたしたちを襲って参ります。死の陰の谷を行くとき、「不安」という名の狼が、わたしたちを襲って参ります。これは、真っ黒な姿をした、双子の狼で、わたしたちが死の陰の谷を通る間、ずっとうろうろとつきまとして、わたしたちを苦しめようとするのです。しかし、羊飼いは、狼がわたしたちに近づくのを、お許しになりません。羊飼いは、鞭を取って「しっ、去れ！」とお命じになります。すると、「恐れ」は、逃げ去って行きます。羊飼いは、杖を取って「しっ、去れ！」とお命じになります。すると、「不安」は、逃げ去って行きます。

神様の導きに自分を委ねて生きる人生。それは、戦いの無い人生ではありません。敵がおります。戦いがあります。苦しい、逃げ出したくなるような、敵との戦いがあります。年老いた王、ダビデは、年老いてなお、敵との戦いから逃れることが、出来ませんでした。そうであるのに、ダビデは、こう歌うことができたのです。「わたしを苦しめる者を前にしても、あなたはわたしに食卓を整えてくださる。わたしの頭に香油を注ぎ、わたしの杯を溢れさせてくださる」

人生において、敵との戦いがあります。しかし、神様は、戦いの中で、なお、わたしたちのために、魂の食物を、豊かに備えてくださるのです。わたしたちは、座って、いのちのパンを食べ、いのちの飲み物を飲みます。わたしたちは、座って、涙のパンを食べ、涙の飲み物を飲みます。わたしたちは、座って、イエスキリストを食べ、イエスキリストを飲みます。それによって、わたしたちは、力づけられます。敵との戦いがあっても、なお、わたしたちは、力の限り、戦うことができるのです。

ダビデは、自分が若かった頃、王様に命を狙われて、昼も夜も追いかけて回された、恐怖の日々を思い起こしていたことでしょう。逃げて、逃げて、追いかけて来るのです。どこまで逃げて、どこまでも追いかけて来るのです。ですが、今ダビデは、恐れから解放され、まったく違った目で、自分の人生を振り返っているのです。ダビデは、神への信頼という目でもって、自分の人生を振り返ろうとしています。こう歌っています。「命のある限り、恵みと慈しみはいつもわたしを追う」

「命のある限り、恵みと慈しみはいつもわたしを追う」 以前は、敵が追いかけて来るのに、おびえていた。逃げて、逃げて、追いかけて来る敵に、おびえていた。でも、今は違う。神の恵みと、神の慈しみが、いつもわたしを追いかけてくる。そのことが、やっとわかった。わたしはそもそも、おびえる必要など、なかったのだ！

人生の最後の瞬間にあたり、ダビデは、憩いの水のほとりに降り立ち、冷たい水をすくって、魂の渇きを潤そうとしています。今、ダビデは知っています。

神が、神こそが、わたしの魂を潤すお方。神が、神こそが、わたしが最後に帰るべき場所。神が、神こそが、わたしの魂のほんとうの憩い。わたしは、神のもとに帰り、神の中で、永遠に安息しよう。

どうか、この歌が、わたしたちの人生の歌でありますように！　どうか、この歌が、わたしたちの人生の歌となりますように！　そのために、どうか、わたしたちも、ダビデがそうしたように、自分の人生を、神の導きに、お委ねすることができますように！　祈りましょう

祈り

主は羊飼い、わたしには何も欠けることがない。主はわたしを青草の原に休ませ、憩いの水のほとりに伴い、魂を生き返らせてくださる。主は御名にふさわしく、わたしを正しい道に導かれる。死の陰の谷を行くときも、わたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。あなたの鞭、あなたの杖、それがわたしを力づける。わたしを苦しめる者を前にしても、あなたはわたしに食卓を整えてくださる。わたしの頭に香油を注ぎ、わたしの杯を溢れさせてくださる。命のある限り、恵みと慈しみはいつもわたしを追う。主の家にわたしは帰り、生涯、そこにとどまるであろう。

主よ、どうか、わたしたちが、主の家に帰ることができますように。

主よ、どうか、わたしたちが、主の家に生涯とどまることができますように。

主よ、どうか、わたしたちが、自分の人生を、素直に、あなたの導きに、お委ねすることができますように。

どうか、信仰をわたしたちに、お与え下さい。

主イエスキリストの御名によって祈ります。アーメン